No.	号	執筆者等	思い
2	1988年4月号	小島清文	・・・。一体、何のために、誰のために、国民はそのような目に遭わなければならないのか。先の戦争のときもそうだったように、死の商人と結託した政治家や権力者のためか。兵隊を将棋の駒に仕立て上げた戦争ゲームで最新装備や戦術を現地で試して見たくてしょうがない軍の首脳たちのためか。（機関誌不戦No.2、1988年4月号）
2	1988年4月号	山内武夫	・・・。もう一つ、天皇と北方領土には共通点がある。それは、”絶対化”という点である。両者とも実は歴史的、相対的なものに過ぎないのに、超歴史的、絶対的なものであるかのように扱おうとする人たちがいたし、今もいる、という意味である。（機関誌不戦No.2、1988年4月号）
2	1988年4月号	熊本訓夫	このカーニバル戦闘の陸軍省発表は、第2次大戦中、日本陸海軍のおかした虚偽の戦果発表のほんの一端にすぎない。しかし、虚像の創造は歴史の偽造につうずる。戦争の実像を身をもって体得し、その虚像を見破ることの出来る者は、われわれを措いてほかにない。戦争と軍隊の持つ悪と恐怖を、若い世代に伝えることは、われわれの責務の最大のものであろう。（機関誌不戦No.2、1988年4月号）
2	1988年4月号	坂入浩一	1945年2月10日の夜、私たち、生き残りの兵士たちが、パンジヤン島の東海岸にひっそりと集まった。・・・。私は学徒出陣出身の陸軍一等兵であった。・・・1月、私たちの部隊がポロ島から引き揚げ、原隊がいるセブ島リロアンに戻ろうとしたとき、米軍が上陸してきたのである。なにしろ、ここは小さい島だったし、戦闘部隊でない私たちは、約10日間の戦闘のすえ、敵部隊に切り込み、部隊長は自決し、いわば玉砕してしまった。（機関誌不戦No.2、1988年4月号）
2	1988年4月号	長谷川静馬	1972年、私は『ある虜囚の死』を出版した。インド洋の孤島アンダマン島でおこった戦犯関係をまとめたものであった。その島の首都ポート・ブレアに第12海軍特別根拠地隊の司令部があり、私は、そこの主計隊に属していた。（機関誌不戦No.2、1988年4月号）
2	1988年4月号	森井司郎	「総員、飛行甲板に上がれ！」戦場は、まさになぶり殺しにも等しい修羅場であった。ついで、「総員、退艦せよ！」の発令から16分後の1414、日本海軍最後の虎の子のように大切にしていた航空母艦「瑞鶴」はルソン島北端の東北東260カイリに沈没した。（機関誌不戦No.2、1988年4月号）
2	1988年4月号	日高玉光	戦争中、第7号掃海特務艇（214トン）という海軍の小艦艇に乗っていた。戦争終盤の昭和19年8月から20年2月初めまでの半年間をマニラで過ごした。 ・・・。2月4日払暁、電撃の如く「米軍マニラに突入」の警報。（機関誌不戦No.2、1988年4月号）